

沼尻 維一郎 編輯
西南太平記

十四号

下



10

15

20

25

30

A 434
20

西南太平記十四編卷之下

東京 沼尻絳一郎編輯

第廿八回 萩竹田の両所へ官軍進撃す
并高山一等警部危と遁る

儲も五月三十一日午前二時十五分西京發の
電報み曰く長州萩および須佐邊のりの来
集合して銃器刀劍を携へ間道と經て山口
へ出るより報告ありよりて詰合せの巡查と

西南太平記

十四編下二

48-7803

ゆりく警備せり兎徒ハ三十日夜十一時ころ萩
警察出張所ニ切り入らんと巡查十五名斥候
のため警部二人引率萩地方ニ發遣せり
跡より四十名を出す支度中兵の到着まで
死をゆりて防禦すまゝ大分へ繰り込むと
する兎徒ハ警視隊の巡查ニ破られ敗走し
て退き去る二十九日ニ各所より大進撃を
し竹田城と始トめ数壘と陥し入きて兎徒と

追ひ走し市中ハ為り兵火ハ罹ると漸鎮靜
ふ赴むかん同三十一日拂曉よりテルカク道のケ
ボシ道の三道進撃兎徒の堡壘と拔兎徒數
多と追撃して官軍勝利我ガ屯田兵ハ前本ヤ
カタまで進軍せし逆徒死骸と棄て走し
銃器弾薬を分捕かよび生捕あり尤人吉不接
まる三里まとの他の二道の鎮臺兵進軍せんと
且我ガ軍曹即死一名卒の傷二名あり鎮臺兵

の傷も之をあるより又鹿兒島警視局告報
の續き

五月二十七日上陸するや否や右松祐永
を海兵より縛り龍驤艦に拘留す続
て田邊小野田林等該艦に至り右松等
を尋問し其始末を参軍に上申す翌二
十八日官職を剥ぐ且城下にあり該縣
の警部巡查と解職帰郷せしむ警部

九そ二百名余巡查六百名をど二十七日
軍艦の入港をうけて市中人心騷然た
り兵士上陸胸壁を築き人民恐怖家財を
馬車に積んで退散す多くの谷山その他近
郷へ走る上町人民は多分退散して悉く
閑戸す下町色の豪商も残らず立退き
窮民幾んど残るのをりと言ふ城下をに
あつ逆徒の家族等怒火の如く自然に隊

と作り人夫等を雇ひて官途に在る者の
 家屋と破毀すそのうち警視官員の家屋
 と多く破毀す尤も諸郷とも前同やう
 あり諸郷逆類尤も多し家族自ら官逆
 の両派に分れ親子と雖も決して言語と交
 へず小兒といふども互ひに唾するに至る
 偶我兵老幼女子道路と問ふと敢て答
 へず必ず唾して去ると云ふ

今に至るまで逆徒の家族の夜中糧米
 彈藥梅干等と陸續軍中送るといふ
 若し該縣あり兵端を開く事ありべ家
 族婦女子が兵糧等ハ少くも問ふく弁ず
 るの見込るりとつゝめりとも逆徒あり本月
 一日重富より先横川色と兎徒三小隊程
 歸縣の説あり故に川路正七郎増山某と
 平服せし探偵として行しむ横川近傍

官軍長
州萩
進撃す



一泊の夜兇徒三人抜刀にて押入川路
 之を覺り辛くして退くの際蒼卒増山と
 為知置同氏の漸く山間と潜んで景況を
 考ふるよ人の叫ぶ声を聞而已同士の去
 る三日本營又歸る増山の未だ不帰是を
 以て考ふるよ果して同氏の殺害せられ
 一と思はる西郷出立後箕田長億、紙幣
 證券切手と四万圓製造一内二万圓を

戦場を送るといふ此の紙幣の承惠社にて
 製造す副社長の園田彦右門ありといふ
 横山貞固の辛くして死を免れ追々盡力
 此の項の巡查本營に屬するといふ同人の
 嘯又逆徒が縣下を繰り出したるの惣員
 九四万人ありといふ農民の今年戦争あり
 れを田を耕すも無益なりその上租税及び
 まば草芒々として山野の如くといふ

古川源助兄弟ハ逆徒ニ黨ト手負のより
抄の他手負ふて帰縣ゆり居る者あり
尤も官軍入縣の様子を聞追々逃去る
りのあり且日向口へ送致せしもあり
島津從二位公以下の官軍上陸後櫻島へ
立退き相成り候ゆり尤も河村參軍より
種々説論相成候得共逆も力不及且つ
療養の爲とて強て赴りたる由該縣

士族輩南郷其他所々へ集合せしより何
事と謀るや未だ詳あらず亦官兵も充
分あらずぬり行届らざる趣該縣下病院
粹山資綱も在るより付捕縛の爲に巡
査赴きしより早くも此事を察し庭の高
塀を越し遁れ去りゆり行方知れざる
よし

官軍着の際別府新助歸縣その景況を

探索一兵と募り既ニ繰り出しの手都合
のところで官軍追捕の模様を知り直ちよ
遁走したりといふ新助の言は曰く戦争
の八部通り勝得たり今少し入敷ありんば
全勝の必せり杯偽言と構へ兵と募り居
りいと言ふ新縣官の去る二日着鎮撫方
より頗る盡力をする目途なれども即今の
様子にての中々着手あらず依てまが兵

と要して戸長共と召一大家名分の有
るところと示し追々人民と説諭するの
見込をありと云ふ
即今の模様別ニ戦端を開くの見込を
いと人ども彼若し襲撃をすることあり
ば忽ち一圓の騒擾を醸し終ニ無智の人
民をも殺し盡すに至るべしと懸念少
からず趣きあり



逆将横山の衆
を窺ふとせむ



右の件々の九等警部平林忠正その他
巡查より親問するところの儘筆記
て申上候るあり

去る二十七日午後二時より萩原隊岡へ臺兵を合
せて総進撃し大砲小銃と連發すその砲声空
又夷き恰も霹靂の碎けて落つるが如くあり
一かを逆軍ハ之ハ應撃し千變万化よその
黒烟の隙をハ潜り奮撃突戦し互ひハ火花

と散りしと戦ひしと終り逆兵ハ官軍の猛き
勢ひよ敵し難くして引退きし官軍方大勝
利其中新募の巡查即死一名手負十二名
逆徒死傷ハ数知れず官軍益々破竹の勢ハ
よ勇ま進んで切り込こたり斯る程ハ逆徒ハ
黄昏の鐘の音と合圖とや為たりけん散乱せ
し逆徒俄よ備へと立直し戦ひ止ずま一日向
路より兇徒三百名餘佐伯と襲ひ臼杵よ向ふ

様子由々同二十八日二の陸軍巡查兵を以て手
當一猶跡より数百推出すまゝと逆將桐野を宮
寄二居り威二壯兵と募り軍事裁判所を取
設けて逆將の桐野が其長より一とりの既二
島津久光公が櫻島へ退居の後ち早くも西郷
桐野の両逆將が竊二同所二赴きて面謁を乞
ひたる二島津老公の一時かく脱走して家令を
以て傳言よの大事と興一たる二の遇て言ふ

べき語もぬ一と断然謝絶らまゐるより一風説
ありと云ふ

鹿兒島縣下武村多の西郷大將の宅の官軍よ
り番兵が嚴重二取締と附られ一と尤も西郷
氏の妻を始め女共が徒黨一して官員方の故宅
破毀亦行き女隊を進撃せ一が何方ともな
く船よて退去一とりの曩二八代よる戦争在り
時高山一等大警部一衆二抽二逆軍へ斬

入り必死なりありて勇ゆうを振ふるひその勢いきほひ猛虎もうこの
 荒あはたる如ごとくの働とき又また多く逆徒ぎやくとを斬きりまひけ
 られ一ひとカバ被等ひらも認とめて遁のがすまどと三人
 むりり取とて返かへり烈はげしく斬きてあがるのを少すくし
 も屈くせず奮撃ふんげき突戦とつせん一ひと互たがひに火花ひたを散ちら
 て戦いくさふりち傍かたら又またある野中のらの古井ふるいへおりて
 ず足あしを踏ふ落おし水音みづおとたりく落おち入いるに逆徒ぎやくと
 も各々おのづか見下みくだして討損うちとぜいと悔くめども引ひき揚あげ

べき手段しゅんもなけむその俥陣しやじんを退ひき一ひとが又
 陥入おちいり高山こうやま氏の暫時ざんじよして浮上うきあり見あ
 るところ上うの側かたもなく一ひとに土滑つちまりあ
 苔深こけふかく這上はるべき便べんもなけれど何時いづまもあ
 てあるべきと持もたる刀やいばと土つち又また突つたて是こゝを力ちから
 よが登のぼらんしころいといとあせまども如何いうせ
 ん踏止ふみとまりとかまのぼしと幾度いくたう水みづ又また落おち入いり
 たる困苦くんくの何壁なんへきへんものもなかく此俥古井こゝ又また死しま



高山警部
奮戦誤り
古井も落ち



るよやと天を仰いど歎々まーが太刀音砲声遠
ざかつて漸戦ひも終りーさま又然らる人々を
呼たて只管救助と求めて見ん若しも味方の
近傍に居ずー逆徒の声を聞つけられ疲勞
又乗トて討つとも其のまゝ恨むるところよあ
らざと聲を限り又呼とつるよぞ折るー兩三
人の巡查が聞つけ忽ち多人数あり来り
救ひ揚げられーの實又危ふき更ありき

まゝ戦地よあいに種々の困難を究めたる人も
多かりーが中よ就て爰よ九死を出て一生を
得たると云ふの長野縣の士族よーて東京本所
柳島町十五番地よ寄留せる岡山寄忠の長男寄
正二十年の幼年の時よりーて學問を好む又馬術
をよー近頃警視本署詰の巡查よ拜命ー
たるが鹿兒島の逆徒が熊本へ乱入の聞えあ
りー最初よ戦地出張を命ぜられ数度の戦ひ

と歴く五月十日ふの熊本鹿兒島の境へな
 る小川峠の兇徒を討ち取ると敬言視の一隊
 三百人山野村より進撃し此の日の戦ひが十同日
四度目の戦ひあり
 午後一時より六時ま総軍必死と戦
 ひしが兇徒の存外多勢よて殊よ嶮阻の地
 と占たるよ官兵心のたけけきと遂に利あり
 大乱れとち引退らんひきりぞとをそ見て逆兵急よ
 追ひ迫れを寄正の踏止まりと暫時の程こそ

の支へたもとと勢ひ防ぐと敵一がと奮撃突
 戦し火花を散らしと戦ひが終ふ身と翻へ
 し退きしかを其場を遁れ走りつ駈ぬけて道
 の傍への賤が家へ潜るひそと匿るかくと後ろより逆兵
 數多逐ひまがつて表裏より込と入まば元來
 狭き茅屋の忍ぶ隈さへあらけみく逆徒の
 為め見出さき手取り足どり衣服を奪へば
 アハヤ此處よて討つとあ思へば敢て争へぬ

ど左様るく斬るべき景色もろく厩の方より一人が荒縄とび持来りて前る柱と縛りつけ土間の竈の下搔とて螢バウりの火と求めて柴と轉して吹つけ火を故ち寄正つらく思ふやう戦地の習ひ弾丸や劍の下と命と殞すの當然とも云ふべきと云る人多しと云ふ衣服と剥れ生るぐろろとして焼殺す逆徒の所業こそいと憎けきと云ふ切齒とる

レ？傍へと見れば炎の漸々燃えひろがり茅が軒端の夕風と煙りの家と充滿て苦し堪へぬ折りもとり六十有餘の一人の老女此家のあらとと覚しめて何方より駐けつくるは是幸ひと救助を請へど老女の厩へ走入つて矢庭と馬を引出さんと絆綱をとらてあせれども力及ばぬありさまよ此の縛りめを解あつて疾その馬も引出して助けんりのを



西陣の陣

十四編下
十七



おらおまよりまよひん
岡山寄正難と道れ
て陣營へかへる

西陣の陣

十五

と云ふ声の漸々入りて身入りて煙りの下と匍匐入りて菜刀片手縛をフツリ切を寄正の辛く遁れて厩へ行き絆綱搔繰り引出し裸脊をひらりと飛乗て危ふく其場を遁れしとどはと兇徒の未々の者至つて何れも又戦ふと更又辨へる只皇國の為めとのを聞込んて居る輩らありとりの左の通りの論書を頒布せしれしと

今般生捕たる薩摩人どもと取糾すともろ謀逆の初めより一筋は御國の為めとのを思ひ込てその朝敵たるを辨へずして張本人は荷擔いとし候輩も少からずあるひに此の節にいたり降参致すとも官軍にてはその罪を赦されず杯申し觸すも付詮方なく戦死と覚悟候このも右之哉は相聞え不便の次第

候右様の儀に決して無之儀に付假令
張本人は與一且の官軍にむらひ候者
りとも前非を後悔しその趣を誅へ
降参を願ふよおいてはその罪を被免候
條一刻も早く理非を辨へ賊軍の汚
名を免らば申すべし此旨相諭候事

明治十年五月 官軍先降本營

茲より大分縣の暴徒の四國とさし渡海せし

と云ふ

去る二十六日大坂より告報の趣きなる

伊豫松山の士族へ暴徒の執力ひつ不意に襲

ひ来たらんも右ららねを防禦の手配り

等へ兼てそろ得あくべしとその筋より

内々達せらましと云ふ

又山口縣の巡查隊に盡力し秋良木澤と

乗り取りカセが阪へ哨兵を張るに至る

と既^{すで}に六月二日 巡^{しん}査^さ一同進^{しん}を萩^{はぎ}を廻^{めぐ}復^{かへ}を
ると云^いふ

是^こをより 萩^{はぎ}山口^{やまぐち}の暴^{がう}黨^{とう}沸^わ騰^{たう}して屢^{しばしば}
國^{くに}の時^{とき}弊^{へい}を論^{ろん}ト同^{どう}士^しと一^{いつ}く集^{しゆ}合^{ごう}る
一^{いつ}他^た邦^{ぼう}の黨^{とう}等^らと通^{つう}むるより 諸^{しよ}縣^{けん}
の不^ふ平^{へい}士^し族^{ぞく}等^ら是^こを應^{おう}訪^{ぼう}せしより
且^{かつ}のまゝと大^{おほ}口^{くち}街^{まち}道^{どう}岡^{おか}の大^{おほ}激^{げき}戦^{せん}に至^{いた}り
續^{つづ}て桐^{きり}野^の利^り秋^{あき}の四^し國^{こく}邊^{へん}まで進^{しん}撃^{げき}

ありつる譯^{わけ}の第^{だい}十五^ご編^{へん}に至^{いた}り詳^{くわ}に
記^き載^{ざい}をべし

西南太平記十四編卷之下 終

百四十八三巴

十四編下二二ト

明治十年六月十五日 御届
全 十年七月廿八日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

沼尻絰一郎

編輯兼
出版人

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本專賣書屋

東京

須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
和泉屋市兵衛
三家村佐兵衛
須原屋伊兵衛
和泉屋金右衛門
出雲寺萬次郎
岡田屋嘉七
須原屋新兵衛
和泉屋吉兵衛
須原屋佐助
丸屋善七
藤岡屋慶次郎
山口屋藤兵衛

東京

森屋高兵衛
雁金屋清吉
和泉屋勘右衛門
山城屋政吉
村上出店
内藤支店
紀伊國屋源兵衛
紀伊國屋梅次郎
大坂屋藤助
袋屋龜次郎
河内屋文助
東圓作
米谷助右衛門

豐後佐伯
周防岩園

